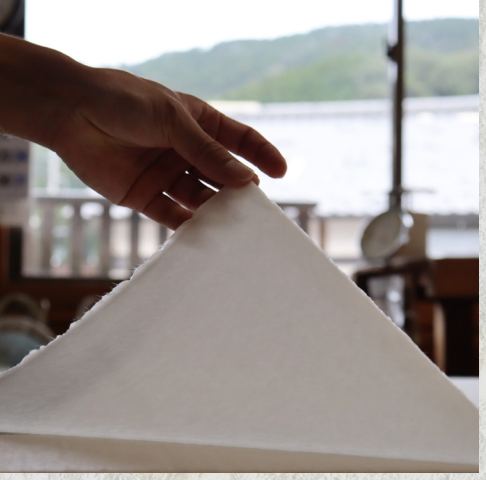


一枚の紙に、技術を込める。

今手漉き和紙の後継者や原料の楮を育てる人の不足、和紙の需要減少などの課題を抱えています。また、どう次の世代へつないでいくかも課題です。一方で、手漉き和紙の技術を身につけようと研修に励む人もいます。原料を守る、技術を学ぶ、和紙を使う―。それぞれの力をつなぎながら、伝統を残すだけでなく、これからの時代へつなぐことが求められています。

「紙を漉くって、こんなに難しいんだ。研究生として和紙を漉くまで、和紙づくりについて何も知りませんでした。実際に紙漉きの現場に立ってみると、思っていた以上に細かな感覚が求められることに気付きました。」

そう語るのは、細川紙・大河原和紙技術者研究生の市村太樹さんです。

現在、道の駅和紙の里ひがしちちぶで細川紙技術者協会正会員となることを目標に、技術向上を目指して励んでいます。

和紙を漉く

①「均一に漉く」

和紙づくりでは、原料となる楮の繊維を均一に分散させ、一枚の紙に仕上げていきます。

しかし、同じように動かしているつもりでも、紙の厚さや繊維の入り方は変わってしまいます。

「思いどおりにいかない日もあります。その日の気温や水の状態、楮の繊維の具合によって、紙の仕上がりは変わります。だからこそ、手の感覚で繊維の動きを感じ取りながら、細かく調整することを意識していて、より良い一枚を漉くために試行錯誤を続けています。」



②「手で覚えていく」

繰り返し和紙を漉く中で、少しずつ感覚を身につけていきます。

「和紙漉きには、一寸の狂いも許されない確かな感覚が必要です。均一な厚さに何枚も仕上げるのは、研究生として7年目を迎えた今でも難しく、厚さのばらつきがでたりと、失敗することもあります。」

③「一枚ができるまで」

一枚の和紙が完成するまでには、さまざまな工程があります。その一つひとつに、人の手と時間がかかっています。

学び・漉き・伝える

実際は、想像以上に難しい作業の連続。それでも、何度も和紙を漉くことで少しずつ感覚が身につきます。

「和紙を漉く技術は、見ているだけでは分かりません。実際に手を動かしたときに初めて分かることがあると学びました。」

難しいからこそ、できるようになりたい。その積み重ねが技術となり、受け継がれてきた和紙の技術を次の世代へつなぐことにつながります。



市村　太樹さん

道の駅和紙の里ひがしちちぶで、細川紙・大河原和紙技術者研究生として技術の習得に励んでいます。自ら和紙を漉きながら、学び、より良い和紙を漉くために日々努力を重ねています。